

7月号 病害虫防除

降雨が多い時期ですが、防除は十分にできていますか？昨年のように梅雨明けが遅くなる可能性もありますので、降雨状況に応じて薬剤散布を臨機応変に行い、防除の徹底に取り組みましょう。

また、本年は気温が高く推移してきたことから、害虫の発生時期が早くなっています。圃場を観察し、防除適期を逃さないようにしましょう。

<露地カンキツ>

○黒点病

累積降雨量を目安にした定期的な薬剤防除が最も重要です。梅雨時期は降雨が続きますので、前回散布から次回散布までの目安の累積降雨量を超えそうな場合は、雨の合間を縫ってでも散布を行ってください。

薬剤はマンゼブ水和剤（ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤）またはエムダイファ－水和剤を使用し、散布後の累積降雨量 200～250mm（累積降雨量に達しない場合は散布1か月後）を目安に再散布を行います。6月の防除でマシン油乳剤を加用した場合は、累積降雨量 350～400mm を次回散布の目安とします。なお、マシン油乳剤は7月以降に使用すると果実の糖度低下や果実腐敗を助長する場合がありますので、6月までの使用とします。

気象情報は実際の圃場の降雨量と異なるため、簡易雨量計を設置するなどして圃場での降雨量を把握しましょう。

○かいよう病

本病が問題となる園（レモン、いよかん、はるみ等の中晩柑、高糖系温州が植栽された園、幼木園、高接園、風当たりが強い園等）では、7月上旬にクレフノン 200 倍加用コサイド 3000 2,000 倍またはクレフノン 200 倍加用フジドーLフロアブル1,000 倍等を散布します。

本病は雨によって病斑から病原細菌が流出し、周囲に感染が拡大します。特に台風等の強風雨によって感染が著しく助長されることから、台風襲来等が予想される場合は、7日前～前日までに上記の薬剤で防除を行いましょう。襲来後の防除では効果が劣ります。

ミカンハモグリガによる被害痕は病原菌の侵入口となるため、本病の感染を著しく助長します。そのため、新梢新長～硬化期に防除を行いましょう。被害葉は可能であれば取り除きます。

冬季に防風網の設置などの防風対策に取り組まれていることと思います。台風シーズンになる前に、改めて点検を行いましょう。

○ミカンサビダニ・チャノキイロアザミウマ

7月中旬はミカンサビダニとチャノキイロアザミウマを同時防除する適期です。コテツフロアブル 4,000 倍、アグリメック 2,000倍、ハチハチフロアブル 2,000 倍等を散布しま

す。

○カイガラムシ類

近年カイガラムシ類の発生が問題となる園が散見されます。第一世代幼虫を対象とした6月の防除は適期にできましたか？7月中旬頃はマルカイガラムシ類やイセリアカイガラムシ等の第二世代幼虫が発生する時期です。園内の発生状況をよく観察し、薬剤が到達しにくい部分（果実と葉・果実の接合部等）にも薬剤がかかるように散布圧力を少し高める等して丁寧に防除を行ってください。

薬剤は、モスピラン SL 液剤 2,000 倍、スプラサイド乳剤 40 1,500 倍、エルサン乳剤 1,000 倍、ダントツ水溶剤2,000倍、トランスフォームフロアブル2,000倍等を使用します。

○ゴマダラカミキリ

本年は気温が高く推移したことから、早い時期から発生がみられています。本虫は地際部に産卵する傾向が高いため、成虫が産卵する時期（産卵最盛期6月～7月）及び卵～若齢幼虫期に地際部に薬剤散布を行うことが重要です。若齢幼虫期を過ぎると幼虫は木部に食入するため、防除は困難になります。若齢幼虫期の7月中旬までに、モスピラン SL 液剤 2,000 倍、スプラサイド乳剤 40 1,500 倍、エルサン乳剤 1,000 倍、ダントツ水溶剤2,000倍等を枝幹～地際部を中心に散布しましょう。

ただし、一部地域においてスプラサイド乳剤に対する感受性の低下が確認されていますので、成虫の発生が目立つ場合は他剤を使用して防除を行ってください。

食入した幼虫に対しては、捕殺するか専用の薬剤を使用します。薬剤には園芸用キンチョールまたはロビンフットがあり、食入口の木くずを除去してからノズルを食入口に入れて噴霧します。

<ハウスミカン>

○アザミウマ類

園内外の雑草等で繁殖したアザミウマ類が、ハウス内に侵入して被害を発生させます。そのため、着色前に園内外の除草を徹底するとともに、ハウスサイドにアルミ蒸着シートや光反射シート織込ネットを設置し、ハウス内へのアザミウマ類の侵入を防ぎましょう。

アザミウマの種類によって効果の高い薬剤が異なりますので、発生種に応じた薬剤を選択してください。収穫時期が近い園では、薬剤の収穫前日数にも注意します。使用する薬剤については、6月号を参照して下さい。

アザミウマ類の食害からも果実腐敗は発生するため、防除を徹底しましょう。

<不知火>

○汚れ果

施設栽培の‘不知火’では、赤道面から果頂部側に集中して黒点症状を生じる「汚れ果症」

が問題となります。本病は高湿度条件で発生が多くなるため、換気などの湿度対策を十分に行ってください。また、薬剤ではマンゼブ水和剤が有効です。露地栽培の黒点病防除と同様に、前回散布から累積降雨量250mmまたは散布後1ヶ月を目安に散布すると、高い効果が期待できます。散布ムラがないよう丁寧に散布しましょう。

<ナシ>

○黒星病

梅雨入りが早かったこともあり、本病が発生している園が散見されます。6月下旬から7月上旬は果実が黒星病に最も感染しやすい時期のため、スコア顆粒水和剤等のDMI剤を必ず散布してください。

また、①葉に本病が発生している園、②6月下旬～7月上旬の防除以降、降雨が続く場合、③毎年収穫時期に被害が発生する園では、7月中旬～8月中旬にも再度DMI剤を散布してください。

○ナシヒメシクイ

殺虫剤の散布間隔が空くと発生が多くなることがあるため、散布間隔が10日以上空かないように防除を行ってください。

交信かく乱フェロモン剤を設置している園でも、園外から交尾済みの雌が侵入して被害が発生する場合がありますため、10～14日間隔で防除を行います。なお、‘幸水’では果実に薬液の汚れが残りやすいので、フロアブル剤を使用しましょう。

○ハダニ類

梅雨明け頃から発生が多くなります。収穫に追われると防除が後手になりやすいので、ハダニ類の発生がみられる園では、発生初期の防除を心がけましょう。収穫時期が近いことから果実の汚れが少ないコロマイト水和剤2,000倍やスターマイトフロアブル2,000倍を散布します。

○チュウゴクナシキジラミ

本年は4月に多発生したものの、その後の薬剤散布によって発生はほぼ抑えられています。しかし、効果の高い薬剤が少ないことから、発生に注意して早めの防除に取り組みましょう。

○ハウスナシの収穫後の薬剤防除

収穫終了後は、黒星病、炭疽病対策としてデランフロアブル1,000倍やキノンドーフロアブル1,000倍を散布します。ハダニ類等の害虫の発生が多い園では、殺虫剤を加用してください。ただし、収穫が終わってない園が近くにある場合は、薬液が他のナシ樹にかからないよう飛散には十分注意して散布してください。

<ブドウ>

○枝膨病

果実肥大期から袋掛け前までは果房の汚れ等の問題で、本病に効果の高い薬剤が散布できなかったため、散布間隔に空いている場合があります。袋掛け後の防除がまだの園では、本病に効果の高いストロビードライフロアブル2、000倍を散布してください。

○べと病

曇雨天が続くと発病が多くなります。本病は、一度発生すると抑制するのは困難ですので、予防防除を心がけましょう。薬剤はボルドー液（I Cボルドー48Q、66D）50倍を散布してください。なお、I CボルドーにアビオンE 1,000倍を加用すると防除効果が向上します。ただし、散布間隔は20日以上空くことがないように注意してください。

<キウイフルーツ>

キウイフルーツは品種によって使用できる薬剤に制限があるため、暦や関係機関の指導に従って薬剤を使用してください。

○果実軟腐病

剪定枝、枯枝等は伝染源となるため、園外で処分してください。防除薬剤にはフロンサイドSC2,000倍（収穫30日前）またはアリエッティ水和剤600倍（収穫120日前）、トップジンM水和剤1,000倍（収穫前日まで）等を使用し、果実だけでなく枝葉にも十分薬液が付着するように丁寧に散布します。

アリエッティ水和剤は収穫前日数が120日と長いため、収穫までの日数に十分に注意して使用してください。

○すす斑病

6～7月は本病原菌が果実に感染する時期です。ベンレート水和剤 2,000倍またはダコニール1000 500倍、ストロビードライフロアブル 2,000倍等のいずれかを散布します。果実だけでなく葉の表裏、棚面の上の方にある枝先にも薬液が付着するように丁寧に散布してください。特に遅くまで伸びているような枝には発生が多くなりますので、しっかりと散布します。